
管理局戦争外伝

ヤマグチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

管理局戦争外伝

【Nコード】

N7984Z

【作者名】

ヤマグチ

【あらすじ】

激化する時空管理局と反管理局勢力Unionとの戦争。あがらう事のできぬ巨大なウネリの前に、なすすべなく翻弄される人々。管理局勢力に属する魔力を持たない人々の視点から見た戦争とは・・・。筆者のそんな妄想を書き連ねた作品です。生暖かい目で見守ってやってください。本編同様Blogの方にも掲載しています。

ある戦場の風景（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

ある戦場の風景

「ハアハアハア……」

荒い息を吐きながら、いったいつからこうなってしまったのだろう。

薄暗い塹壕の中で、少しでも油断すれば気が狂いそうになるのを抑え、彼は必死に考えていた。

絶え間なく続く砲声と爆音、絶叫と怒声、ツンと鼻をつく生臭い鉄分を含む独特な血の匂い。

あまりに濃厚なその匂いに、襲いくる吐き気に耐え切れず思わず隣に座る戦友の肩を押しのと、戦友はそのまま横に倒れ込み、

頭の中身をドシャリと泥の上まき散らす。

彼は思わず、その少ない胃の内容物を倒れた戦友の上に吐き散らしながら、どこか冷静な部分で、ああだからか、そう思った。

右隣に座っていた兵士が半狂乱になりながら叫ぶ。

「ヒイツ、も、もう沢山だ！！　クルシュの日には帰れるんじゃない

なかったのか！！

嫌だ嫌だ嫌だっ！ 俺は死にたくない、死にたくないっ！ 帰るっ！ 俺は家に帰るぞっ！！」

兵士は泥で薄汚れた背囊を背負い、小銃を片手に立ち上がるが、その行為は爆音の中でも凜と響く声で遮られる。

「 貴様！ 栄えあるレキシントラ兵でありながら、恥知らずめっ敵前逃亡は許さんぞ！！」

いまだこみ上げる吐き気に、四つん這いになっていた彼は木霊したその声の方に視線を向ける。

ああっ、そういえばこんなのもいたっけな。

立ち上がった兵士に向けインテリジェントデバイスを掲げる魔導師の姿が見える。

時空管理局に勤めるとこぞの貴族の令嬢だったか。

泥に塗れた塹壕の中で、多少薄汚れているとはいえ純白のバリアジヤケットを纏ったその姿は、彼の目には酷く現実離れた光景に映った。

いつ頃からだったのだろうか、時空管理局の職員がデバイスの非殺傷設定を解除するようになったのは……。

強力な魔法を打ち出すその兵器を向けられた兵士は、かわいそうに、ガタガタと震えながら言葉にならない呻き声を発するばかり。

「まったく、これだから魔法も使えぬ平民不風情は……」

デバイスを構えたまま、彼女はまるでゴミでも見るかのような視線を兵士に向け愚痴をこぼし続ける。

偉そうに、まったくもって、魔導師というのはいけ好かない連中ばかりだ。彼は思う。

貧村の出である彼は、毎年のように要求される法外な税を中央の政府に納められ無くなった両親の代わりに、やむなく兵役に就くことになった。

中央都市の基地に配属になったばかりのころは、見るものすべてが珍しく、煌びやかな都市の生活風景に興奮した日々を過ごしていたが、

その興奮もすぐに覚めることになる。

魔法適正者による非魔法適正者への差別。

都市の外縁に広がるスラムへの警備行動が命令されたのは基地への配属から5日後のことである。

彼の所属する小隊がスラムに到着すると、そこにはすでに時空管理局の魔導師数名が到着しており、中央政府の依頼によって住民に対する強制退去を行っていた。

いくら非殺傷設定とはいえ、当たり所が悪ければ死んでしまうことだってあり得る魔法を、住民たちに乱射する姿に怒りを覚えた彼は、

抗議を行おうとしたが、周りにいた上等兵に抑えられ、これがこの日常なんだと説き伏せられた。

彼自身は後で知った話が、この地に駐留する時空管理局員の中には嬉々として政府からの依頼を受け、ゲーム感覚で住民を撃つ者もいる。

彼ら持つものにとって、この国で、持たざる者は無に等しい存在だったのだ。

クソツタレの魔導師共め。

いまだ魔導師からの怒りを向けられている兵士を助けるべく、吐き気をこらえながら立ち上がるつとめる。

それに、今日はまだましなほうだ。

彼は思った。

いつもならば機械兵の前進に合わせて、航空機による地上攻撃が加わるのだが今日に限って地上攻撃の支援は無いようだ。

塹壕からわずかに乗り出し、クリープ小銃を構えながら機械兵が有効射程に収まるまでその陣容を眺める。

相変わらず馬鹿げた数だ……。倒しても倒しても次から次へと湧いて出てくる。

銃眼越しに圧倒的な物量を持って迫る敵軍に若干の羨望を含んだため息をつきつつ、愛銃の引き金に指をかける。

塹壕のあちこちから銃声上がるが、開戦初期に比べその音は明らかに貧弱なものとなりつつあることに彼は気づいていた。

補給が滞りがちな戦線で、初めに沈黙したのは支援砲撃、次に重機の類が徐々にその声を小さくし、今では歩兵小銃の音しか聞こえないこともざらだった。

引き金を絞る。

パンという炸裂音と共に、狙いを着けていた機械兵がよろめく、だが、それだけだった。

次の瞬間には機械兵が体勢を立て直し、前進し直すのが見える。

ここ最近になって見られるようになった光景だ。

やはり敵は強化されている。

彼は愛銃に次弾を装填しつつ、再度敵兵に照準をつけるため銃眼を覗こうとすると、敵の前列に閃光が走り戦車が爆散し戦列が乱れるのが見て取れた。

「うおおおおおー—————」

周囲の兵士から歓声が上がリ、どん底まで落ちかけていた士気が若干上がることを感じ取る。

銃眼から目を外し、頭上にちらりと目をやると、先ほど兵士を叱責していた女魔導師がデバイスを構えているのが見える。

砲撃魔法で敵の戦車を吹き飛ばしたのだ。

航空型の機械兵が前線に出てきていない今、彼女達魔導師の砲撃を邪魔する者はいない。

彼女はそのまま数発の砲撃魔法を放ち敵の前列を次々と打ち砕いてゆく。

純白のバリアジャケットに包まれたその姿は味方の兵士にとって、まるで女神のように映っていることだろう。

「 栄光あるレキシントラ兵士達よ！ 臆するな！ 正義は時空管理局にある！ 共に勝利への道へと突き進むのだ！！ 」

女性とは思えぬ大音声と共に放たれる言葉は、兵士達の戦意を高揚させるには十分であった。

周囲の興奮が最高潮まで達した時、彼女はそのまま敵の戦列に飛び込み、機械の兵士たちを蹂躪し始める。

それに伴い銃撃の音が激しくなっていく、誰もが目の前にある小さな希望に縋りたいのだろう。

補給の途絶えがちな自軍と、強化され始めた敵軍。

戦争の勝敗など誰の目から見ても明らかだろうに……。

彼は一人冷静に、機械兵に狙いをつけ引き金を絞ろうとすると、前方からグーーンという聞きなれた音が響いてくる。

敵の航空型、その姿は遠目にも従来の航空型の機械兵とは明らかに異なっていることが見て取れる。

彼女達はいつものごとく航空型に果敢に挑んでいく。

何時も通りなら、敵はその数に物を言わせて彼女達魔導師の動きを封じるのが精いっぱいのはずだが、今日は違った。

変幻自在に空を翔ける彼女たちに難なく追いつき、次々にその光弾を打ち込んでいく。

何時もとは真逆のその光景に、周囲からは悲鳴が上がり始める。

そうこうしているうちに、一人、また一人と魔導師はその数を減らしていき、最後は大音声を上げていた女魔導師が空飛ぶ鉄の筒の直撃を受け爆散した。

「あっけない最期だったな。」

彼が視線を上げぼそりとつぶやく。

次の瞬間、彼は激しい衝撃にその身を木の葉のように吹き飛ばされ、体中のいたるところに表現できないような激痛が走る。

目が見えない。

どのくらい時間が経っただろうか？

おそらく仲間の兵士だろう。

耳元で何かを叫んでいる。

もう痛みも感じない。

すごく眠い。

今までずっと戦ってきたんだ。

もう眠らせてくれてもいいだろう。

次第に薄れゆく意識の中で、彼の脳裏には両親の姿と、結婚を約束した幼馴染の彼女の笑顔が映る。

教会の前で純白のドレスを着る彼女はとても美しかった。

『 あゝああ、くたばっちまいやがった。 』

『 それにしても、なんでこいつ笑ってるんだ？ 』

『 さあ？ 幸せな夢でも見てたんだろ？ 』

『かもな、にしても新型のドロイドは高性能だな。』

『これじゃ新兵や予備役の訓練にもならんよまったく。』

『せつかくちようどよさそつな辺境にまで足を延ばしたのにな。』

『とんだ無駄足だな、ドロイド共は手加減をしらん。』

『次はうまくやるように上に申告でもするか。』

『八八八八』

管理局戦争

西暦2015年に第97管理外世界、日本国に端を発したこの戦いは、次第に局地戦の様相を脱し、魔法勢力圏全域を巻き込む世界大戦へと発展する。

多くの国家が、時空管理局と反管理局勢力「Union」に分かれ争うこの戦いは、帝國という桁外れの巨大国家が本格的に参戦

を果たしたことにより

形勢は次第に「 Union 」へと傾いてゆくことになる・・・

ある戦場の風景（後書き）

なのは達の様なエースが存在しない戦場だと、
こんなものなのかな？ そう思いながら書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7984z/>

管理局戦争外伝

2011年12月25日17時58分発行